



二十二日、土曜の役場に伺った。期日前投票に訪れる人達と共に、私は二階に上がった。大きな印刷機の前に座り、電源を入れる。これからここで、ポスターを印刷する。

加藤文俊研究室の学生達は二十一日、三宅島に到着した。到着早々、三名の島民の方に学生達が取材を行つた。取材を終えその日のうちに、ポス

ターの大きさを活かしきる写真、そしてそれだけでは伝えきれないことを言葉で綴り、制作をすすめていく。取材という短い時間の中で、自分達にお話をしてくれた方の表情や、話の中から浮かび上がつてくるその方の信念。少しの時間の中で惹かれた多くのことを、その方自身、そしてポスターを見た方に伝えたい。私達は夜中まで、何度も試行錯誤を繰り返す。

そうしてようやく出来上がつたポスターを刷り終え、私は御藏島会館へ戻つた。一緒に作つた仲間と、そして取材させて頂いた方とポスターを眺める。何度経験しても取材先の方をお渡しする瞬間は、緊張と高揚を感じる。

普段この島で生活していない、よそ者の私達だからこそ感じる魅力。島で暮らす人、そしてこの島のことをもう知りたくなる。ささやかな一枚のポスターが、少しでも島の生活を映すことができるよう。この思いで、これからも私達は作り続ける。

(竹下 純)

阿古地区に面白い神社があると聞いて足を運んだ。御藏島会館から少し歩いたところに、こぢんまりとした神社がある。靖ヶ浜の海を臨む場所に建つ、屋根だけの小さな社の中には、人の顔ほどのある大きな鯨の骨が安置されている。神社の名は「鯨神社」。鯨を祀る、全国でも珍しい神社だそうだ。

この阿古地区に、古くから伝えられ

ている話がある。天保年間、三宅島は大変な飢饉に見舞われた。農漁業ともに不振が続き、離島ゆえに食するものもなく、住民の飢えも限界に達した。

そんなとき、靖ヶ浜に巨大な鯨(全長四十八メートルとも伝えられている)が打ち上げられた。島の人々は、この肉を切り取つて五つの村に分配するこ

とで、当分の間飢えをしのいだらしい。後に、その鯨の骨を靖ヶ浜に葬り供養したところ、農漁業は豊作豊漁となり、島は飢饉から逃れることができた。

後年、先祖の志を継いだ島の人々が鯨供養のために祠を建て、その鯨の骨

暮らしを映しだす、ポスターを

～ 鯨 神 社 ～



2013年
(平成25年)
6月23日
日曜日

あしたばん編集部
発行所: 加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第三十七号



○ 島の子供 ○

朝七時、バタバタと廊下を走り抜け音が響いた。様子を見に行くと、見たことのない少年が全速力で元気よく走り回っている。その少年は寝起きでまだ朦朧としている先輩と親しげに話したりじゃれたりと、朝からものすごいエネルギーだ。少年の名前は彦坂信也。趣味はロツククライミングと釣り。

三宅島で生まれ、三宅島で暮らしている小学五年生だ。加藤文俊研究室とは去年のキッズリサーチ以来からの付き合いだという。始め私とはあまり会話を交わさなかつたが、一緒に遊んだり話したりしている内に、自然に壁をなぐすことが出来た。

信也はとにかく元気だ。朝に魚を釣り、昼は虫を追いかけ、夜は食卓で釣った魚を振る舞う。いたずらを仕掛けては笑い転げるものの、大人に囲まれた十才の信也は、みんなの役に立とうと一生懸命夕食の手伝いをする。

彼の活発さと素直さはこの島に育まれたものだろうと私は考える。流れる一つが彼に吸収され、島を駆け抜けれる彼の姿は、都会の子供にはない魅力がある。

「三宅島の海がキレイだから好き」と彼は言う。私は信也にこれからもこの三宅島の海の様にキラキラとした明るい青年に育つてほしいと思う。

(白羽相仁典)

